

## 「実践演習」の効果の検討(2) 大学生の成長の自覚と「地域連携実践演習」の履修

### The Effectiveness of "Service Learning" 2 : Subjective Growth and Registration for "Service Learning in the Community"

高木邦子

文化政策学部 国際文化学科

Kuniko TAKAGI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本論は、平成27年度から本学に新設された科目群、「実践演習」に含まれる一科目である「地域連携実践演習」の教育効果に関する縦断調査の報告である。

研究1では、2016年4月に大学2年生を対象とした調査での自由記述から、学生が入学時からの1年間で自身の成長を自覚した側面をKJ法により分類し、同調査で成長の影響要因として選択された項目との関係を示した。結果、7つの成長の側面が得られ、各成長の側面には、授業・アルバイト・授業以外での自主的活動といった複数の経験が影響要因として報告された。

研究2では、研究1で得た成長の側面から作成した項目を用いて、2017年4月に2年生を対象とした調査を実施した。入学時からの1年間で各項目の成長の程度について評定を求め、「地域連携実践演習」の履修の有無による得点差を検討した。結果、「地域連携実践演習」を履修した学生は、履修していない学生よりも企画・運営力、異世代の人との人間関係スキル、目標に向けて協力する姿勢での成長を報告した。以上の結果から、「地域連携実践演習」は大学生に成長を促すような経験を提供する科目であり、実際にこの科目を履修した大学生が幾つかの面で成長を報告することが示された。

This paper is the second report of a longitudinal study that confirms the educational effects of "Service Learning in the Community", which is one course in a class grouping called "Service Learning".

In study 1, the factors of subjective growth described by university students were classified into seven categories based on the KJ Method. The factors that influenced subjective growth were varied, including classroom experiences, part-time jobs and activities conducted outside of the classroom. In study 2, the questionnaire included a subjective-growth scale that was made based on the categories classified in study 1, and was conducted on sophomore students. The results of growth scores on "Service Learning in the Community" indicated that the students who registered to take the course showed higher subjective growth scores in planning and operation skills, interpersonal skills with different generations, and purposeful cooperation than those who had not register to take the course. The results also indicated that "Service Learning in the Community" provided students with experiences that fostered their levels of subjective growth in some of the factors.

#### 1. 本研究の目的

平成27年度から本学で新設された科目群「実践演習」は、学生に学外の世界に目を向けたり活動にかかわったりする機会を提供することで、ジェネリックスキルの獲得・向上を期待した科目群である。すなわちこの科目群は、ジェネリックスキルの向上を意図した側面と、大学外・授業外での活動機会の提供という側面をもつ科目と位置付けられる(高木,2015)。

高木(2016)では、この科目群に含まれる科目のひとつである「地域連携実践演習」の履修による学生のキャリア獲得の機会活用スキル得点の変化を比較した。その結果、「地域連携実践演習」の履修者ではむしろ、非履修者よりも人間関係スキルをはじめとした幾つかのスキル得点が有意に低下した。この結果は、高綱・浦上・杉本・矢崎(2014)により作成されたキャリア獲得の機会活用スキル尺度6CS(6 Skills scale for Career)が「どの程度うまくできるか」という学生自身の評価を訊ねたものであったことから、「地域連携実践演習」の履修が学生のスキルそのものを低下させたというよりは、地域との連携事業にかかわるほど、それらのスキルに対する自信が低下したと考察された(高木,2016)。だが、学生の自信と実際にどのような成長を遂げているかは異なるものである。そ

こで本研究では、自信はなく成長そのものに焦点をあて、「地域連携実践演習」の履修と大学生の自覚する成長との関係から、科目の効果を検証することを目的とする。

ところで高木(2016)では、大学生に自身の成長・停滞の自己評価として「成長した部分がある」「少し成長した部分がある」「全く成長していない/成長した部分がない(停滞している)」という3つから選択を求めたが、成長の側面には、知識面や行動面、思考面などさまざまなものがあると考えられる。「地域連携実践演習」の履修により成長する面があるとしても、その側面は多様であると推測されるため、研究1ではまず、大学生が自身の成長を自覚する側面についての自由記述をKJ法により分類し、それぞれの側面が「地域連携実践演習」をはじめとする大学での授業や、授業外でのさまざまな経験といったどのような要因に影響を受けたと考えられているかを探索的に検討する。

研究2では、「地域連携実践演習」の効果に注目し、研究1で分類された成長の側面をもとに作成した項目を用いて調査を実施する。各成長の側面における大学一年間での成長の程度を「地域連携実践演習」の履修の有無により比較することで科目の効果を検証することを目的とする。

## 2. 研究1

### 2.1 目的

大学生が自身の成長をどのような側面で自覚するのかを自由記述をもとに分類し、本調査で使用する成長側面の尺度作成に資するデータを得ること、および成長の影響要因として報告されたものが、どのような成長側面と関連しているのかを探索的に検討することを目的とする。

### 2.2 方法

平成28年度4月に、本学の全2年生を対象とした年度初めのガイダンスにおいて、任意協力であることを説明したうえで無記名による質問紙調査を実施した。ガイダンス会場出口で回収箱により回収されたアンケート237名分を本研究の分析対象とした。なお、このアンケート調査の一部は高木（2016）でも報告されているが、本研究では以下の項目を分析対象としている。

- a. **成長の側面** 大学に入学してから自分自身が成長した否かを訊ねたうえで、その成長あるいは停滞の自覚について、「成長した部分がある」、「少し成長した部分がある」「全く成長していない／成長した部分が思いつかない（停滞している）」からひとつ選択するよう求めたうえで、どのような面から判断してその選択をしたのか自由記述で報告を求めた。
- b. **成長の影響要因** a.で答えた自身の成長の側面に影響した要因について、「授業（実践演習を含む）」「授業以外の大学でのイベント運営等」「その他、学内の施設での経験（ex.英中センター、学生相談室、図書館etc.）」「サークル活動」「ボランティア活動」「海外での滞在経験（留学等）」「アルバイト」「ひとり暮らしや通学などの生活面」「人間関係」「その他ひと・もの・こととの出会い」に「その他」を加えた11項目から当てはまるものすべてを選択するよう求めた。

### 2.3 結果

#### (1) 成長側面の分類

**回答者数と得られた記述の数** 回答者237名のうち、成長・停滞の側面について記述があったのは189名(79.7%)であった。このうち、複数内容を含む記述を分割して、301の記述を得た。内訳は「成長した部分がある」を選択したうえで挙げられた記述が115、「少し成長した部分がある」を選択したうえで挙げられた記述が163、「全く成長していない／成長した部分が思いつかない（停滞している）」を選択したうえでの記述が23であったが、「成長した部分がある」を選択しても成長していない側面を挙げた記述や、「全く成長していない」を選択したが、自由記述では成長した側面を挙げた記述もみられた。本調査の目的は、大学生がどのような側面から自身の成長または停滞を自覚しているかを分類することであるため、本研究では停滞に関する記述も含めて「成長を判断する側面(成長側面)」の分析を行った。

**KJ法** 心理学を専門とする大学教員と著者の2名でKJ法を実施した。得られた301の記述をそれぞれ印刷してラベルを作成し、一枚のラベルに複数の要素を含むと判断したものをさらに分割しながら類似した要素をまとめて小

グループの表札を作成した。そのうえで、小グループの表札間で近い要素同士をまとめて更に中グループ、大グループと大きなまとまりができれば表札をつけることを繰り返し、大学生が自身の成長を自覚する側面として、最も大きなまとまりとしては『社会性』『セルフ・マネジメント』『積極的・主体的取り組み』『思考力』『自己の確立』『知識・技能』『社会観』という7つのカテゴリーを得た。Table 1に、グループ編成のプロセスと命名された表札、含まれる記述内容の一部を示す。

最も多くのラベルが分類されたのは『社会性』であり、対人関係全般において成熟や上達を感じている記述と、特に年代の異なる他者との関係に言及している記述を含む「対人関係」と、会話や発言のスキルに焦点を当てた「コミュニケーション力」にかかわるラベルが分類された。次いで多い『セルフ・マネジメント』では、一人暮らしなど生活面での自立にかかわる「日常生活の自己管理」と、課題達成までの計画性やタイムマネジメントといった「タスクの管理」と表札に命名されたラベルが含まれた。以降、「積極性・主体性」を示す行動の増加に関する記述と、行動の取り組み方である「取り組み姿勢」から成る『積極的・主体的取り組み』、「視野・視点の変化」「考え方の変化」を含む『思考力』、「進路についての思考」と「資格取得」「自己理解」からなる『自己の確立』、大学での学びによる知識や技能の上達に関する『知識・技能』、「マナー・常識」と「労働観・金銭感覚」から成る『社会観』、と続いた。

#### (2) 成長を自覚した側面と影響要因

回答者が自分自身の成長の影響因と感じているものについて複数選択を求めた結果は、高木（2016）にあるとおり「アルバイト」が最多であり、必ずしも大学で提供される経験とは言えないものであったが、それ以降は「授業（実践演習を含む）」、「人間関係」、「ひとり暮らしや通学などの生活面」「サークル活動」と続き、大学生活と関係がみられる項目も成長の影響要因として多く挙げられていた。

Table 1で示された成長の各側面を記述した回答者が、成長の影響因として各項目を選択した頻度をTable 2に示す。提示した項目のうち「授業以外の大学でのイベント運営等」「学内の施設での経験（英中センター・学生相談室・図書館etc.）」「サークル活動」「ボランティア活動」「海外での滞在経験（留学等）」は、全て、大学の授業でもなく、また対価が得られるアルバイトでもない大学生ならではの活動とみなすことができるため、「授業以外の自主的活動」とまとめ、「授業（実践演習も含む）」「授業以外の自主的活動」「アルバイト」「ひとり暮らしや通学などの生活面」「人間関係」「その他のひと・もの・こととの出会い」「その他」として各成長側面の記述者が選択した割合をFigure 1に示す。

いずれの成長側面についても、複数の影響要因が報告されていたが、顕著な結果としては『社会性』と『積極的・主体的取り組み』の影響因に「授業以外での自主的活動」が選択されていた比率が順に30.6%、33.1%で最多、『社会観』で「アルバイト」が選択されていた比率が32.1%で最多であった。『知識・技能』は「授業（実践演習も含む）」が27.3%で最多であった。その他の成長側面については、複数の影響要因が比較的均等に選択されており、『自

Table 1 成長を自覚した側面 各グループの表札と含まれる記述

大グループ 表札	中グループ 表札	小グループ 表札	含まれる記述(抜粋)
社会性 (79)	対人 関係 (57)	全般的 対人関係 (48)	<ul style="list-style-type: none"> <li>人と協力することができるようになった</li> <li>人間関係を前より上手く築けるようになった</li> <li>人見知りしなくなった/(-)人見知りがひどくなった</li> <li>人との出会いを楽しめるようになった</li> <li>臨機応変に人や状況に対応できるようになった</li> <li>幅広いタイプの人と仲良くできるようになった</li> </ul>
		異世代・ 年上との 関係(9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>目上の人と接する心構えができた</li> <li>幅広い年代の人と付き合えるようになった/(-)幅広い他者との関係が維持できない</li> </ul>
	コミュニケーション 力(22)	<ul style="list-style-type: none"> <li>親しくない人とも話すことができるようになった</li> <li>様々な人と話したり自分の意見を言ったりすることができるようになった</li> <li>コミュニケーション力が前よりついた/人と会話するのが前よりうまくなった</li> </ul>	
セルフ・マネジメン ト(59)	日常生活 の自己管 理(21)	<ul style="list-style-type: none"> <li>家事全般ができるようになった</li> <li>金銭面のやりくりや家事を上手く回せるようになった</li> <li>(-)体調管理ができなかった</li> </ul>	
	タスクの 管理(38)	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間の管理ができるようになった</li> <li>先を見越して目標や計画を立てられるようになった</li> <li>やるべきことを効率的にやるようになった</li> <li>ひとりでできることは出来るだけやる</li> </ul>	
積極的・主体的 取り組み (46)	積極性 ・主体性 (34)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自主学習をするようになった/(-)まだまだ大学での勉強が受動的</li> <li>自分で考え行動することが増えた/挑戦する意思、やるだけやってみようと思えるようになった /責任感が強くなった</li> <li>積極的にいろんな課外活動に参加できた/(-)自ら動くことが出来ていなかった</li> </ul>	
	取組姿勢 (12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>困難な課題を最後まで取り組めるようになった</li> <li>集中力が上昇した</li> <li>困ったとき・問題が発生したとき人に助けを求めることができるようになった</li> <li>信念や根拠を持って行動できるようになった</li> </ul>	
思考力 (29)	視野・視 点の変化 (11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>色々な考え方ができるようになった</li> <li>様々な視点から物事を見ることができるようになった</li> <li>客観的に物事を見られるようになった</li> </ul>	
	考え方の 変化(18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>深く掘り下げて考えるようになった</li> <li>物事を鵜呑みにしないようになった</li> <li>嫌なことがあっても前向きに考えるようになった</li> </ul>	
自己の 確立(29)	将来の 見通し (22)	進路につ いての思 考(19)	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来やりたいと思うこと、関心をもつことができた</li> <li>将来のことについて真剣に考えることが増えた/将来を具体的に考え始めた</li> <li>自分のおかれている状況や進路、今なにをするべきかよく考えるようになった</li> </ul>
		資格取得 (3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>資格を取得した</li> <li>取るべき資格を決めた</li> </ul>
	自己理解(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>客観的に自分の性格を理解できるようになった</li> <li>欠点を見つめることができるようになった</li> <li>自分が何が好きなのかうまく見極められるようになった</li> </ul>	
知識・技能(大学での学び) (25)			<ul style="list-style-type: none"> <li>専門知識が増えた/知識・技能が向上した</li> <li>英語力/中国語力がのびた/文章力が上がった</li> <li>大学での学びが実生活や講義と講義でリンクすることが多かった/(-)大学での学びが活かされない</li> </ul>
社会観 (24)		マナー・ 常識(14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>TPOに合わせた言葉遣いや服装を覚えた</li> <li>メールを正しく送れるようになった</li> <li>一般常識</li> </ul>
		労働観・ 金銭感覚 (10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>お金に対する考え方が変わった/お金を稼ぐ大変さを理解できた</li> <li>社会に出ることの苦勞/社会の一員として自覚を持つようになった</li> <li>「働く」ことについての常識を知れた</li> </ul>

注) 表札の括弧内は分類されたラベルの数、(-)はネガティブな表記

己の確立』には「授業以外での自主的活動」が21.2%、「授業（実践演習を含む）」が18.8%と続き、『思考力』の影響因としては「授業以外での自主的活動」は21.2%、「アルバイト」と「人間関係」がともに18.2%であった。『セルフ・マネジメント』は「アルバイト」が21.5%、「授業以外での自主的活動」が19.4%、授業が18.8%と比較的僅差であった。このように、成長側面への影響要因は多

様であり、大学生は授業からも、授業外の自主的活動からも、アルバイトからも、またそれ以外の要因からも幅広く成長の機会を得ていることがうかがえる。

以上を踏まえて研究2では、「地域連携実践演習」の履修の有無による成長の比較をするにあたり、幅広い成長の側面に注目する。

Table 2 成長・停滞の側面と影響要因

<成長・停滞の影響要因>	成長の側面	社会性	セルフ・マネジメント	積極的・主体的取り組み	思考力	自己の確立	知識・技能	社会観
授業(実践演習も含む)	記述数	24	27	18	10	16	21	7
	%	11.7	18.8	13.5	15.2	18.8	27.3	12.5
授業以外の大学でのイベント運営等	記述数	12	6	15	4	3	1	0
	%	5.8	4.2	11.3	6.1	3.5	1.3	0.0
学内の施設での経験 (英中センター・学生相談室・図書館etc.)	記述数	3	2	4	1	2	2	3
	%	1.5	1.4	3.0	1.5	2.4	2.6	5.4
サークル活動	記述数	36	15	20	7	7	7	5
	%	17.5	10.4	15.0	10.6	8.2	9.1	8.9
ボランティア活動	記述数	11	4	4	0	3	4	3
	%	5.3	2.8	3.0	0.0	3.5	5.2	5.4
海外での滞在経験(留学等)	記述数	1	1	1	2	3	0	0
	%	0.5	0.7	0.8	3.0	3.5	0.0	0.0
アルバイト	記述数	46	31	22	12	14	15	18
	%	22.3	21.5	16.5	18.2	16.5	19.5	32.1
ひとり暮らしや通学などの生活面	記述数	25	26	14	11	11	10	10
	%	12.1	18.1	10.5	16.7	12.9	13.0	17.9
人間関係	記述数	29	24	17	12	16	10	7
	%	14.1	16.7	12.8	18.2	18.8	13.0	12.5
その他のひと・もの・こと等との出会い	記述数	15	5	16	7	9	5	1
	%	7.3	3.5	12.0	10.6	10.6	6.5	1.8
その他	記述数	4	3	2	0	1	2	2
	%	1.9	2.1	1.5	0.0	1.2	2.6	3.6
合計	記述数	206	144	133	66	85	77	56
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

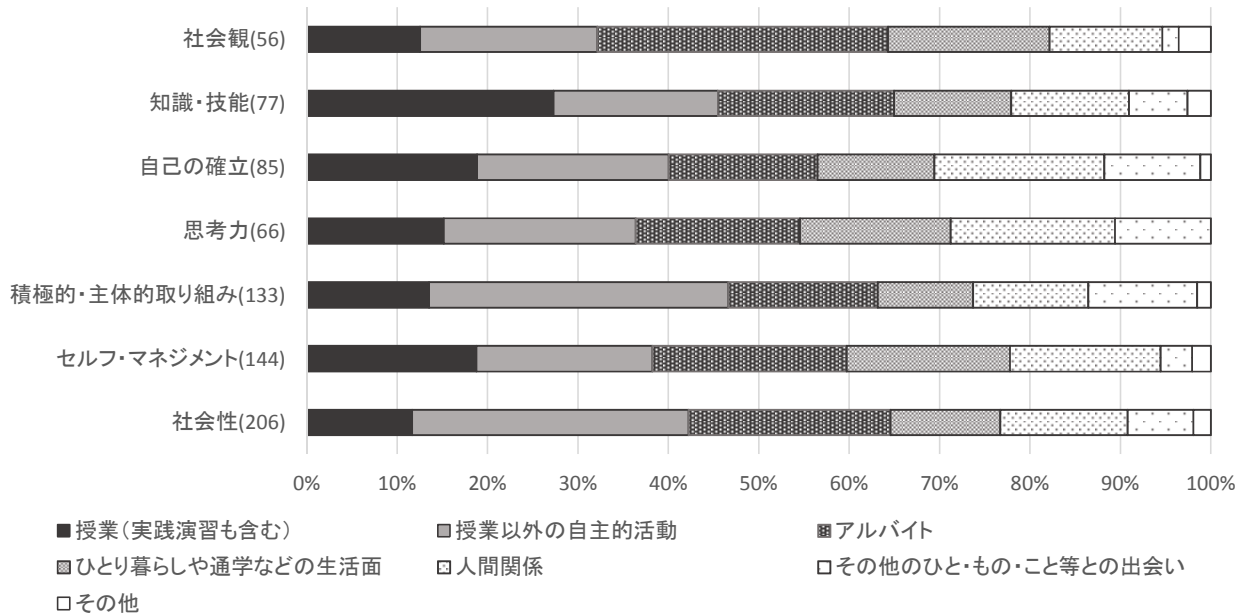


Figure 1 成長を自覚した側面と選択された影響要因(括弧内は述べ記述数)

### 3. 研究2

#### 3.1 目的

研究1で得られた、大学生が自覚した成長の側面の分類を参考に尺度を作成し、「地域連携実践演習」の履修の有無により各側面の成長得点を比較して、当該授業の効果を検証する。

#### 3.2 方法

**調査実施** 平成29年度4月に全2年生対象のガイダンスで実施した任意協力の質問紙のなかで、14項目からなる「成長の自己評価項目」への回答を得た(項目はTable3参照)。大学生活を通じた変化をとらえることを目的とした縦断的調査であることを説明し、無記名だが縦断調査のさまざまなデータと連結する目的のみに使用すると説明したうえで、学籍番号の記載を求めた。

**成長の自己評価項目** 研究1でKJ法により得られた成長の側面をもとに作成した。同世代と異世代の他者との関係づくりやコミュニケーション(『社会性』)、計画性や自己管理(『セルフ・マネジメント』)、主体性・積極性やチャレンジ精神(『積極的・主体的取り組み』)、自己理解や進路に関する意識(『自己の確立』)、大学での学びの成果(『知識・技能』)に加えて情報収集力やプレゼンテーション力、企画・運営の能力など具体的な複数の側面)、社会というものについての考え方や社会でのルール(『社会観』)から成る14項目である。大学入学時から1年間での自身の変化について、各項目に対して「大きく成長した(5点)」から「全く成長していない(1点)」の5段階で評定するよう求めた。

**分析対象者** 調査は任意協力であり、ガイダンス会場の出口で回収箱により回収された質問紙は122名、うち学籍番号に不備があった者を除き117名分の有効データを

得た。一方、現2年生のうち、1年次に「地域連携実践演習」にエントリーして単位を修得した2年生は前期33名(平成28年10月に事後授業を履修)、後期70名(平成29年4月に事後授業を履修)であり、そのうち1名は前期と後期の両方で単位を修得したため「地域連携実践演習」の活動に1年次で参加したのは2年生の102名、そのうち今回の調査に学籍番号を明記したうえで協力した者は50名であった。

以上から、調査協力者のうち1年次に地域連携実践演習を履修した50名と、履修しなかった62名、併せて117名の2年生を以下の分析対象とした。

#### 3.3 結果

成長の自己評価項目14項目について「地域連携実践演習」の履修・非履修者別の平均値の比較をFigure2に、*t*検定の結果をTable3に示す。

14項目のうち11項目は「どちらともいえない(3点)」から「少し成長した(4点)」の間の得点を示していたが、「プレゼンテーションの力」「ものごとを企画し、運営する力」「タイムマネジメントや計画性・継続性などの自己管理力」の項目は他の項目と比べると成長の自覚がやや弱かった。

「地域連携実践演習」の履修者と非履修者での成長の自己評価得点の比較からは、特に「ものごとを企画し、運営する力」( $t(108) = 2.199, p < .05$ )、「異世代の他者との人間関係のスキル、コミュニケーションの力」( $t(108) = 2.132, p < .01$ )、「目的に向けて協力する姿勢(協調性)」( $t(107.95) = 2.272, p < .01$ )の3項目で、履修者の方が有意に高得点を示した。

以上から、「地域連携実践演習」の履修者は、非履修者と比べて幾つかの側面で成長を自覚していることが示され

た。高木（2016）で履修者のキャリア選択スキル得点が低下したと合わせると、「地域連携実践演習」を履修して何らかの活動に参加した学生は、機会活用スキルにつ

いての自信は低下を示す一方で、経験を通して成長を実感していると考えられる。

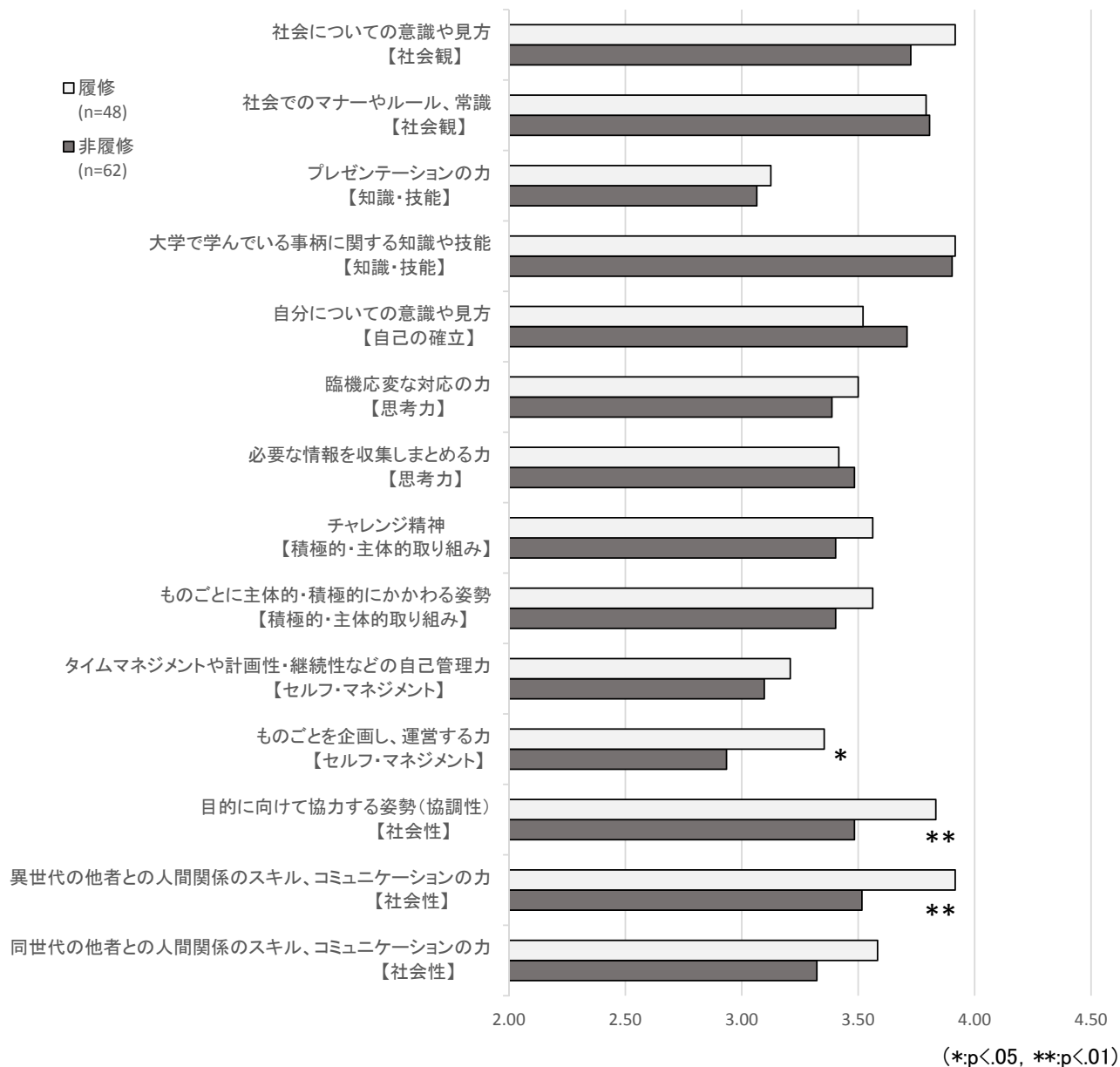


Figure 2 地域連携実践演習の履修による成長の自己評価得点の比較

Table 3 地域連携実践演習の履修による成長の自己評価得点のt検定結果

		地域連携実践演習		F 値	t 値
		非履修 (n=62)	履修 (n=48)		
1	同世代の他者との人間関係のスキル、コミュニケーションの力 【社会性】	Mean SD	3.32 1.004	3.58 .942	.378 1.387
2	異世代の他者との人間関係のスキル、コミュニケーションの力 【社会性】	Mean SD	3.52 1.020	3.92 .919	3.459 † 2.132 *
3	目的に向けて協力する姿勢（協調性） 【社会性】	Mean SD	3.48 0.919	3.83 .694	7.467 ** 2.272 *
4	ものごとを企画し、運営する力 【セルフ・マネジメント】	Mean SD	2.93 0.998	3.35 .978	.525 2.199 *
5	タイムマネジメントや計画性・継続性などの自己管理能力 【セルフ・マネジメント】	Mean SD	3.10 1.036	3.21 .922	.267 0.588
6	ものごとに主体的・積極的にかかわる姿勢 【積極的・主体的取り組み】	Mean SD	3.40 0.999	3.56 .848	2.351 0.885
7	チャレンジ精神 【積極的・主体的取り組み】	Mean SD	3.40 1.093	3.56 .920	3.222 † 0.811
8	必要な情報を収集しまとめる力 【思考力】	Mean SD	3.48 0.784	3.42 .821	.071 0.437
9	臨機応変な対応の力 【思考力】	Mean SD	3.39 0.837	3.50 .772	.199 0.726
10	自分についての意識や見方 【自己の確立】	Mean SD	3.71 0.797	3.52 .743	.000 1.269
11	大学で学んでいる事柄に関する知識や技能 【知識・技能】	Mean SD	3.90 0.844	3.92 .895	.000 0.081
12	プレゼンテーションの力 【知識・技能】	Mean SD	3.06 0.903	3.13 1.064	2.589 0.322
13	社会でのマナーやルール、常識 【社会観】	Mean SD	3.81 0.884	3.79 .713	.863 0.094
14	社会についての意識や見方 【社会観】	Mean SD	3.73 0.772	3.92 .613	5.430 * 1.445

(†:p&lt;.10, \*:p&lt;.05, \*\*:p&lt;.01)

#### 4. 考察

本研究の目的は、「地域連携実践演習」の履修が大学生の成長に及ぼす効果を検証することであった。高木（2016）では、「地域連携実践演習」の履修学生は、履修前後で幾つかのキャリア構築スキル得点が有意に低下していたが、本結果では「地域連携実践演習」の履修後には、異世代の他者とのつきあい方、企画・運営力、目的に向けて協力する姿勢など複数の面で成長が自覚されていることが示された（研究2）。以上から、本科目が社会とかわることでスキルの自信を失う機会となると同時に、成長に繋がる機会を提供していることが示唆されたといえる。

また、本研究では、大学生が自身の成長を自覚する側面として、KJ法により『社会性』『セルフ・マネジメント』『積極的・主体的取り組み』『思考力』『自己の確立』『知識・技能』『社会観』の7分類を得た。これらの各成長に影響を及ぼした要因は、「授業」「授業外の自主的活動」「アルバイト」「ひとり暮らしなどの生活面」「人間関係」「そ

他のひと・もの・こととの出会い」であり、学生が成長を自覚する側面は多様だが、それらに寄与する環境や経験もまた、多様であることが示された。

#### 課題と今後の研究

「地域連携実践演習」の位置づけの明確化 本論の研究1の調査では、成長の影響因として「授業（地域連携実践演習も含む）」という選択肢を設けたが、この科目のプログラムには地域連携実践演習として参加する者もいれば、完全に自主的なボランティアとして参加する者がいる場合もあり、「授業以外での自主的活動」との弁別が困難なものもある。「授業」は、KJ法で分類された成長側面の『知識・技能』の影響因のひとつであったが、「地域連携実践演習」はむしろ『積極的・主体的取り組み』の影響因として作用していたかもしれない。「地域連携実践演習」は、大学入学直後で自主的な活動の場を見つけることが困難な新入生にも活動の場を提供し、学生の成長の機会を増やすという点で意義ある科目であるが、成長を促す側面についても他

の「授業」とは異なる面も含め、科目の位置づけと意義を明らかにしたい。

**履修者の特性との関係** 高木 (2015) では、「地域連携実践演習」を履修する学生の特徴として、そもそも「興味探索スキル」「継続スキル」「人間関係スキル」などのキャリア構築スキルが高いことが指摘されている。こうした履修者の特性と「地域連携実践演習」の履修との関係については、キャリア構築スキルが低い学生でも本科目を履修することでスキルが高まるのか、そもそもスキルが高い学生のみが本科目の履修により成長の機会を得るのか、更なる検討の余地がある。

**成長の客観的指標** 本研究では、学生の成長の指標として学生自身が自覚した成長側面を報告した。だが、実際にそれぞれの側面が成長しているかどうかを客観的にとらえる尺度や評価法を用いて本結果の検証を行いたい。

**成長の側面の詳細な分類** 本報告の研究2で用いた「成長の自己評価項目」は、KJ法で得られた成長の側面をもとに作成したもののだが、各側面を十分にとらえる項目とはいえないものもあった。たとえば『思考力』として研究2では「必要な情報を収集しまとめる力」「臨機応変対応の力」という2項目を作成したが、研究1の自由記述で得られた視野の拡大や考え方の変化、また社会人基礎力(経済産業省,2006)の「課題発見力」「想像力」や21世紀型スキル(Griffin, Care, & McGaw,2012)にある「批判的思考」など、その要素をどのように分類してとらえるかは課題である。社会に必要な思考力を的確にとらえた描写とその具体的内容の整理をすることにより、本科目の目標や評価の視点を定めるのに有益な知見を提供することができよう。

## 引用文献

- Griffin, P., Care, E., & McGaw, B. 2012 The Changing Role of Education and Schools In Griffin, P., McGaw, B., & Care, E. *Assessment and Teaching of 21st Century Skills*. Dordrecht, Springer., pp.1-17. (教育と学校の役割の変化 グリフィン P., マクゴー B., & ケア E. 三宅なほみ(監訳)、益川弘如・望月俊男(編訳)(2014) 21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち 北大路書房 pp1-20.)
- 経済産業省 社会人基礎力に関する研究会 (2006) 中間とりまとめ <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2015年10月1日確認)
- 高木 邦子 (2015) 「実践演習」の効果の検討に向けて：履修学生のキャリア構築スキルの特徴 静岡文化芸術大学研究紀要, 16, 93-100.
- 高木 邦子 (2016) 「実践演習」の効果の検討 (1)：実践演習履修と学生の機会活用スキルの変化 静岡文化芸術大学研究紀要 17, 151-160.
- 高網 睦美・浦上 昌則・杉本 英晴・矢崎 裕美子 (2014) Planned Happenstance理論を背景とした機会活用スキルの測定 ―6SC尺度作成の試み― 日本キャリア教育学会第36回研究大会発表論文集,45-46.